

—獣医学学位取得者からのメッセージ (Ⅶ)—
私 の 学 位 取 得

大場剛実[†] (富山県厚生部生活衛生課)



1 はじめに

私は、2009年、東京大学大学院農学生命科学研究科にて「と畜場搬入豚のアクチノバチルス感染症の病理学的研究」で論文博士(獣医学)を取得した。

私は、1994年に大学卒業し、その後は地方公務員として保健所や食肉衛生検査所に勤務する一般的な公衆衛生分野の獣医師である。と畜検査員としての勤務時に得たデータをまとめて学術論文をいくつか発表、それをもとに学位論文を作成、学位を取得することができた。大学を卒業し、獣医師として社会にでた当時は想像もしていなかった。その概要を紹介したい。

2 学位取得にいたった経緯

大学時代の私は、「論文を書く」ことや「研究成果を発表する」ことには全く関わっておらず、その必要性を感じたのは社会人になって何年か経過してからであった。私たちの現場では、日々直面する事例や問題を解決するには、行政的な事務処理能力と、科学的な知識が必要とされる。しかし、そのような時にいくら調べても必要とされる科学的なデータはなく、その判断に苦慮する事例を多く経験した。

と畜検査では、検査の対象疾病は決まってはいるものの、疾病名には、「敗血症」、「黄疸」、「水腫」、「炎症」など病態的なものが多くある。その原因を解明することは、公衆衛生上のリスク評価、生産現場での的確な防疫措置に役立つと考えた。このような事例の原因を解明し、少しずつでも学術論文として残していくことは、現

場で働くと畜検査員の責務ではないかと考えた。学術論文を作成することは、当然、本来の業務外の作業となり、業務時間外での対応になった。しかし、これはと畜検査員のみが果たせる役割であると思ったことや、この現場だけでなく他の現場でも役立つだろうと思い、学術論文として公表していこうと考えた。

しかし、「学術論文」とはこれまで無縁であった私は書くすべも解らなかつたため、知り合いであった動物衛生研究所疫学研究チームの芝原友幸主任研究員にその旨を相談したところ、ご指導いただけることになった。そして、芝原先生を中心に多数の方々から指導・助言をいただきながら、国内外で7つの学術論文を発表した。そして、気がついてみると1つのテーマに関連した論文が3報(国外)になっていた。そんな折、芝原先生から学位取得の話があった。「まさか自分が」と思ったが、東京大学の明石博臣教授が日獣会誌に執筆された「獣医学における学位の取得Ⅶ」の中の、「最初から手が届かないものとあきらめるのではなく、自分が行ったことの評価を求めるといふ気持ちで挑戦されてみてはどうだろう」、「何事も一歩を踏み出さなければ、結果はついてこない」という言葉に励まされ、挑戦することにした。そして、同大学農学生命科学研究科獣医病理学研究室の中山裕之教授に指導をお願いしたところ、快くお引き受けいただいた。研究者としての肩書きがない私にとっては、本当に嬉しい出来事であった。そこでは、研究の成果をまとめて公表する方法、科学的なものの見方・考え方など、これまで学ぶことのできなかつた貴重な指導をいただいた。

[†] 連絡責任者：大場剛実 (富山県厚生部生活衛生課)

〒930-8501 富山市新総曲輪1-7

☎076-444-3230 FAX 076-444-3497

E-mail : takemi.oba@pref.toyama.lg.jp

3 学術論文を書くため心がけたこと

私はある研究テーマをみつけるとデータを集め、まとめて、積極的にと畜検査員の病理研修会や学会で発表した。なぜなら、発表の準備過程で、そのテーマについて理解が深まるとともに、発表時の質疑応答が学術論文としてまとめる上で非常に参考になるからである。

特に中部獣医師会大会は、身近な学会であり、さまざまな分野の獣医師が参加することから、毎年のように発表した。そして、発表を重ねる度に、そのテーマがまとめる価値があるものとして成熟していくのが実感できた。一方で、論文として成立しないテーマがあることにも気づいた。

1人の知識、経験及び技術だけで、学術論文を完成させるには限界があった。まずは、職場の上司、同僚、知り合いの獣医師にそのテーマの感想や意見を積極的に聞いた。そして何より重要なのは、そのテーマの専門家の意見を聞くことであった。そこでは、現場で認識していなかった専門的な視点や不足していたデータが明らかになった。私は図々しくも同じ獣医師であるということだけで、その専門の先生に何度も問い合わせた。特にこの学位論文のきっかけとなった

Actinobacillus porcitonisillarum の同定は、動物衛生研究所動物疾病対策センター生物学的製剤製造グループの小林秀樹品質管理課長のご指導がなければ不可能であった。この菌は、2003年、Gottschalkらによって、提唱された暫定的な菌種で、病原性などは不明なままであった。我々は、病変部からこの菌を分離はしたものの同定できず、研究をこれ以上進めることができなかった。そこで、思い切って小林先生に相談したところ、当該菌であることが解った。これは、国内初の分離となり、また、病原性を示唆する報告ともなった。これを機にアクチノバチルス属菌に関して様々な指導をいただき、学位論文「アクチノバチルス感染症の病理学的研究」へと発展していった。

幸いにも、私が問い合わせた先生方からは貴重な指導や助言をたくさんいただくことができた。自分の専門的

知識や経験の不足を痛感した一方でとてもよい勉強になった。先生方は、現場で働く獣医師を暖かく見守ってくれているように感じた。そして、この研究を専門誌への投稿論文、学位論文にすることが何よりの恩返しと思い、取り組んだ。

以上のように、まとまった学位論文を作成できたことはさまざまな先生や身近な方々の指導・助言のおかげと思っている。特に職場の理解・協力がなくては、データの収集や発表は不可能で、その職場環境に感謝するばかりである。

4 最後 に

我々の現場には、研究室では見出せない研究テーマが山のように存在していると思われる。

すべてが学術論文にできるわけではないが、できそうなものから取り組んでいくことが重要だと考える。

学術論文というと検査や診断技術の開発などを思いつづくが、残念ながら、我々の職場にはそういった検査や技術を実施できる環境は備わっていない。しかし、現場だからこそ可能なテーマも存在すると思う。たとえば、ある疾病の新たな病原性の解明や特定疾病の疫学的な解析などは、毎日多数の家畜を検査すると畜場では比較的取り組みやすいテーマだと思われる。

我々の現場では数年ごとの転勤があり、最初から学位論文を想定した研究のテーマの設定は困難だと思われる。まずは身近なテーマを学術論文にしていくことから始めてみてはいかがだろうか。やがて1つのテーマに関連した研究が蓄積して、学位論文につながるものと考え。全国にはそれを応援してくれる獣医師の先生がたくさんいることを知った。私もこれからは学位をめざす方々を応援していきたいと思っている。

最初からあきらめず、ぜひ、チャレンジしてほしい。

私の学位取得は、指導教官の方々、動物衛生研究所の先生方、県厚生部、県農林部の先生方の大きな支えがあったからこそその成果と思っている。最後に、関係者の方々に心より感謝申し上げたい。